

小林靖彦精神医療史資料研究

橋 本 明*

はじめに

精神科医・小林靖彦は、『日本精神医学小史』¹⁾や『現代精神医学大系』に収められた「日本精神医学の歴史」²⁾などの著者として知られている。戦後のわが国における精神医療史研究のパイオニアの一人で、とくに精神病治療に関わる民間の保養所や治療施設の研究業績は、いまでも引用され続けている。ところが、ある時期から研究が途絶え、その後の小林の消息を知る人は（少なくとも筆者の周辺には）いないようだった。

しかし、予期しない形で小林靖彦に出会うことになった。2008年の夏、ほとんど偶然から筆者は名古屋市内にある旧・小林邸を見つけた。その空き家を管理する近隣の人から、小林靖彦は2007年に88歳で北海道・旭川で亡くなっていたこと、しかしながら小林

靖彦の研究資料や蔵書がそのまま家の中に残されていることを知った。その後、遺族の好意によって、すべての資料を譲ってもらうことになった。そこで、2008年秋から旧・小林邸で資料の仕分けをし、書籍や論文抜刷、書類（原稿、手紙、パンフレット、スクラップ・ブックなど）、写真（プリント写真、ネガおよびスライド・フィルム）など研究上重要と思われるすべての資料を、3回に分けて筆者の大学研究室へ運び出す作業を行った。

I 日本精神医療史の研究史

小林の資料の中味に入る前に、彼の研究がわが国の精神医療史研究のどこに位置づけられるのかを検討したい。図1が示しているのは、20世紀から21世紀の初頭にかけての時期を3つに分けたとき、その時代を

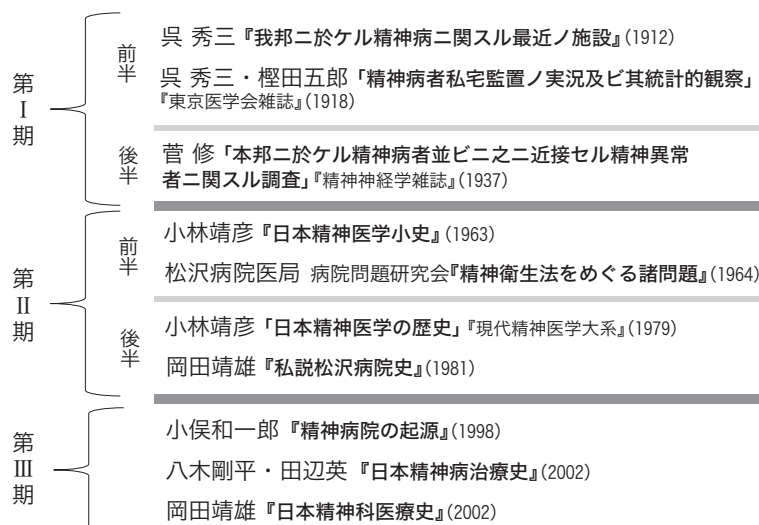


図1 日本精神医療史研究の時代的展開

象徴し、歴史研究にとって重要な文献である。

第Ⅰ期の前半の二つの論文は、東京大学の呉秀三らを中心にした、精神病に関する公立・民間の施設や私宅監置の調査³⁾である。すこし時代が下るが、第Ⅰ期の後半として菅修の精神病関連施設の全国調査⁴⁾も欠かすことができない。

第Ⅱ期になると小林靖彦が登場する。1963年、はじめて日本の精神医療史のまとまったモノグラフ『日本精神医学小史』を出版したのが小林だった。日本精神病院協会理事長などを務め、精神医学史の研究者でもある金子準二は「日本最初の精神医学史の単行本で労作である」と評している（が、「しかし校正が不行届きで、誤刷が多い」と続けている⁵⁾）。ほぼ同じころ、1964年に松沢病院医局病院問題研究会による『精神衛生法をめぐる諸問題』⁶⁾が出された。このなかの「歴史篇」の著者は、当時、東京都立松沢病院に勤務していた吉岡真二と岡田靖雄の両氏だった。

第Ⅱ期の後半になると、小林は『現代精神医学大系』のなかの「日本精神医学の歴史」を担当し、一方、岡田は『私説松沢病院史』⁷⁾という大部の著作を出している。それから20年近く経過したあと、2000年前後からが第Ⅲ期にあたる。このころ再び精神医療史の出版ブームがあった。小俣和一郎の『精神病院の起源』⁸⁾、八木剛平・田辺英の『日本精神病治療史』⁹⁾、岡田靖雄の『日本精神科医療史』¹⁰⁾が代表的なものだろう。

次に、日本精神医療史研究の時代的展開を別の視点から、つまり「研究の系譜」という点から整理したのが図2である。

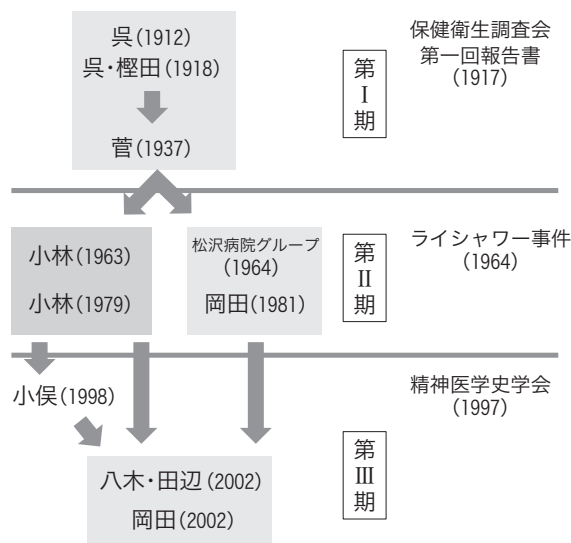


図2 日本精神医療史研究の系譜

第Ⅰ期の1910年代には、精神病患者の実態を把握しようとするいくつかの調査が行われた。すでに述べた呉秀三らによる私宅監置調査もこの時期に進められている。一方で、内務省の諮問機関である保健衛生調査会も1917年に第一回報告書を出し、精神病患者監護法の改正などについて意見をだしている¹¹⁾。

第Ⅱ期の小林靖彦と、松沢病院グループおよび岡田靖雄らは、第Ⅰ期の研究をベースにしていることは確実である。しかし、両者の研究内容や方法は大きく異なっていた。岡田らは中央のメインストリームの制度・政策的な内容を軸にし、さらに、岡田自身の言葉を借りれば「行動しながら歴史し、歴史しながら行動する」という、実践的な研究でもあった。精神衛生法の改定スケジュールに影響を与えた1964年のライシャワー事件なども、歴史研究に刺激を与えたようである¹²⁾。一方、小林は、メインストリームから外れ、地方のアウトサイダーを扱った、フィールドワーク、インタビューを中心にした、いわば歴史民俗学的な方法をとっていた。とはいえ、こうした内容や方法の違いにかかわらず、精神医療と精神障害者にかかわる諸問題が、社会の辺縁に追いやられているという認識は両者に共通だと思われる。

第Ⅲ期は、1997年の精神医学史学会（現・日本精神医学史学会）の創設に象徴されるように、精神医学への歴史的な関心が広がりを持ち始めた時期である。小林の研究活動は事実上終わっていたが、1998年の小俣の著作は、呉秀三・菅修・小林靖彦の研究路線にもとづくものである¹³⁾。そして、最後の2002年の八木・田辺および岡田の著作は、従来の松沢病院グループと小林の双方の影響を受けたものになっている¹⁴⁾。一方で、第Ⅲ期以降には、新しい資料の発掘による実証的な研究、あるいは欧米の研究動向の影響も受けて、日本の精神医療史研究のすそ野は拡大していくが、ここではその詳細は省略したい。

II 小林靖彦の経歴と研究業績

さて、本題にもどって、小林靖彦研究の話を進めるが、そもそも小林がどんな人物なのか、最初に紹介したい。

小林靖彦は、1919年に千葉県に生まれた。父親は軍医だったが、後に大阪の八尾で眼科を開業。小林は旧制八尾中学校、旧制高知高等学校を経て、1944年9月に名古屋帝国大学医学部を卒業し、翌10月には同医学部副手（ただし無給）となり、杉田直樹の神経

精神科教室に入局した。終戦をはさんで、1946年3月には京都帝国大学理学部動物学教室副手となる。この年に京都の岩倉を訪れており、精神医療史への関心はすでに芽生えていたのかもしれない。翌1947年2月には名古屋に戻り、名古屋帝国大学医学部助手に、さらに1949年瀬戸少年院医務課長、1952年岐阜少年鑑別所所長、1954年4月には国立名古屋病院神経科医長代理となる。国立名古屋病院では、岸本鎌一かまいちのドイツ留学中の留守を埋める文字通り代理のポストだった。岸本は小林の名大・杉田医局の先輩であり、後に名古屋大学環境医学研究所長、そして名古屋市立大学精神医学教室の教授となる。1955年4月に小林は瀬戸市にある公立陶生病院に新設された神経科部長として迎えらる。1961年4月には名古屋市立大学医学部精神医学教室の助教授に就任した。直接の上司にあたる教授は、上記の岸本鎌一である。

小林の精神医療史研究の最初の業績として重要なのは、名古屋市立大学助教授時代の1963年に出版した『日本精神医学小史』である。しかし、歴史的な研究は、医学部の中では到底「本流」の仕事とは認知されなかったに違いない。そもそも小林の精神医学研究の出発点は、人類遺伝学的なテーマだった。学位論文は「日本人双生児研究」（1951年3月7日、名古屋大学・医学博士）である。また、1961年に名古屋市立大学に赴任してからは、教授の岸本の専門である「精神薄弱の遺伝生化学」の影響を強く受けた研究を行っていた¹⁵⁾。その成果のひとつと考えられるのが、1963年9月にオランダのハーグで開かれた第11回国際遺伝学会で小林が発表した“A Study of Mental Deficiency on Some Causes”という精神薄弱の成因に関わる演題である¹⁶⁾。また、その後も類似の研究テーマで講演や論文の刊行を行っている¹⁷⁾。大学ではこのような遺伝生物学的な研究と教育に迫られていたためか、『日本精神医学小史』以降、およそ10年間は精神医療史に関わる研究業績はない。

1969年3月に岸本鎌一が教授を退任し、同年9月に小林は名古屋市立大学から転じ、愛知県厚生連尾西病院の5代目の院長に就任した。院長などとしての仕事は多忙を極めたのか、ここでも精神医療史の研究はできなかったようである¹⁸⁾。

1972年1月、名古屋第一赤十字病院の初代の精神科部長に就任。この時、小林靖彦は52歳になっていた。『日本精神医学小史』を出版した1963年前後が精神医療史研究の萌芽期とすれば、1972年から約10年

間がまさしくその黄金期である。大学助教授や病院長の時代にはあまり自由な時間が持てなかった反動か、抑圧されたエネルギーが一気に弾けるように、自分の好きな歴史研究に没頭する。研究が加速された背景には、外的な要因もあったようだ。『日本精神医学小史』の出版以来、小林の歴史研究は精神医学関係者にはよく知られていたと思われ、（おそらく赤十字病院への就任前後に）「日本精神医学の歴史」の論文執筆依頼が小林にきた。それは、1970年代後半から1980年代はじめにかけて中山書店から刊行された『現代精神医学大系』に所収されることになっていた。この原稿執筆にかける小林の意欲は並々ならぬものがあった（図3）。

早速1972年の4月あたりから、おもに原稿執筆のための資料収集を大義とする調査が開始されている。小林は精神病治療に関わる日本全国の施設（病院、神社仏閣、温泉など）の歴史を調べるために、各地の行政機関や個人に宛てた問い合わせの手紙を次々に送ったものと思われる。というのも、旧・小林邸には、各所から寄せられた回答や連絡の手紙や葉書が、研究資料にまじって大量に保存されていたからである。また、小林は現地調査も並行して開始。たとえば1972年の前半に着目すると、奈良・兵庫（4月）、群馬・東京・千葉（5月）、京都（6月）と毎月のように出かけては、関係者へのインタビューや資料の収集、写真の撮影をしている。

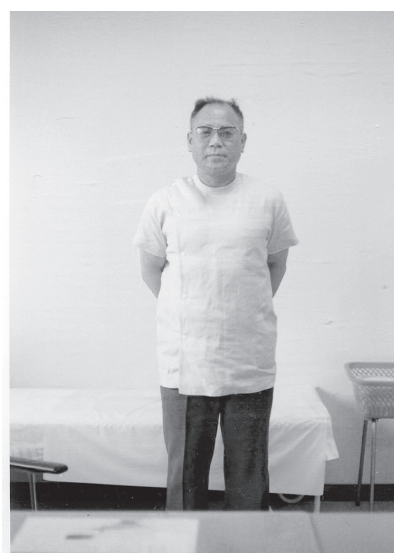


図3 名古屋第一赤十字病院精神科部長時代の小林靖彦

出典：アルバム『名古屋の精神医学史 戦後編』(2)

小林が精神医療史の資料を各地で集めるためにとくに参照したのは、1937年に『精神神経学雑誌』に掲載された菅修の論文¹⁹⁾である。この論文には、当時の精神病に関する全国の施設の名前や住所などの一覧が掲載されている。小林が遺した資料の中には菅の論文コピーがあるが、そこには多くの書き込みがされている。これをもとに各地の機関や施設に手紙を書き、その住所を目指して調査に出かけたに違いない。

小林の精神医療史調査がある程度軌道に乗ってきたと思わせるのが、1973年1月26日および同3月23日に名古屋市立大学で行われたという精神科研究会での発表資料である。これには『精神病者治療所』というタイトルがついている。研究会用の資料といっても100ページ以上の分厚いもので、都道府県（ただし32の都道府県について）ごとにその地域の精神医療に関する歴史を説明し、それらに関わる写真を貼り付けたりっぱなものである。まだ十分な記述がなされていない地域もある。しかし、小林のその後の研究がその不足部分を補う形で進められていったという意味で記念碑的な資料と言えよう。

1974年に『精神医学』誌に発表された論文「精神病者保養所の群生していた2つの地域について」²⁰⁾は、小林が医学専門雑誌に載せた精神医療史に関する論文としては最初のものである。京都の岩倉と石川県の「精神病者保養所」の歴史を比較検討する内容になっている。1946年、1962年、1972年と、過去3回の岩倉訪問を基盤にしながら、新たに開拓したフィールドである石川県での現地調査の成果を最大限に活かした小林らしい論文と言えよう。その後の精神医療史に関わる業績としては、1977年12月の第96回東海精神神経学会での「阿波井神社の水行」²¹⁾、1979年3月の第100回東海精神神経学会での特別講演「東海地方の精神医学の歩み」²²⁾が挙げられる。

1979年には、小林の論文「日本精神医学の歴史」を含む『現代精神医学大系 第1巻A精神医学総論I』が発刊された²³⁾。1982年の『臨床精神医学』誌に掲載された論文「江戸時代の精神医学 2. 治療論」²⁴⁾は、1979年の「日本精神医学の歴史」をベースにしている。

1981年、約10年勤めた名古屋第一赤十字病院を辞し、浜松の医療法人好生会三方原病院の顧問に就任した。名古屋の自宅と浜松の下宿とを行き来する生活が始まる。この頃の様子を小林は次のように述べている²⁵⁾。

名古屋第一赤十字病院精神科部長を約10年つとめ、(昭和)56年春、隠退を決意し、一切の役職を捨てて、浜松のアパートに来て、脳病院づとめをすることにした。独居し、独酌の酔にまかせて眠る午後7時前、酔も醒めて午前2時に起き、歴史書を繙き古い徳川の時代に遊ぶ。自炊の朝食をすませ、自転車走らせること1里半。

7時前後、病院に着き、外来、病棟と走り廻り、午後4時、病院を辞して帰る。

休日は史蹟めぐり、写真を取り、書き留めはするが、発表の意志はない。趣味は自由でなければならないと思うから。

1985年、同じ医療法人好生会が経営する掛川の小笠病院顧問になる。掛川時代の1987年の『臨床精神医学』誌に掲載された「日本精神医学風土記 愛知県」²⁶⁾が、小林の精神医療史に関する最後の論文である。小笠病院には1994年まで勤務したが、そのころには元来の酒好きが影響したのか、体調を崩していたようである。2002年に娘夫婦の住む旭川に移り住み、2007年にそこで亡くなった。

III 小林靖彦の「研究アルバム」

さて、冒頭から紹介しているように、小林靖彦の著作や論文の背後には、膨大な資料がある。小林の研究の基盤となっていたのが、全国から集めた資料や各地で行った数々のフィールドワークである。彼はその過程で集めた資料をこまめに整理している。たとえば「水治療法史」「愛知県の精神病院」といった研究テーマごとにアルバム（通常の写真アルバム）を用意し、そこに自分が撮った写真や他の文献から写した写真、文献コピーや新聞の切り抜きや自らのコメントを貼り付けて、「形にして残す」ことに強く執着していた。こうした「研究アルバム」の制作作業は他の注目を浴びていたようである。小林の仕事は浜松の三方原病院時代に、「地方医学のルーツ調査」が「アルバム700冊分の資料」として地元の新聞で紹介されている²⁷⁾。「地方医学」と書かれているように、アルバムは精神医学だけではなく、各地の医学全般の歴史も扱っている²⁸⁾。

ただ、小林の“文献資料+フィールドワーク（インタビュー／写真撮影）→アルバム整理”というスタイルが最初から確立していたわけではない。1963年の『日本精神医学小史』を執筆していた頃には、おもに

文献資料の収集が中心だったと考えられる。この本の「序」に寄せて、名古屋市立大学時代の小林の上司にあたる岸本鎌一は「(小林)氏は、たゞ文献によって跡づけるだけではなく、現地に赴いてしたしく調べ上げて、写真まで撮っている。手と足で書いた書物であると云える」²⁹⁾と述べているように、明治期以前から精神病治療の場所として知られていた、京都・岩倉の大雲寺、岡崎の灸寺、および岐阜の鉄塔山天上寺などについては、小林が実際に訪れた時に撮影したと考えられる写真を本に掲載している。だが、本格的にフィールドワークを始め、アルバムを制作しだしたのは1972年の名古屋第一赤十字病院赴任以降である。

いずれにしても、小林の「研究アルバム」は、精神医療史研究にとって重要度は高い。このアルバムの上澄みだけが、上で紹介した著書や論文として刊行されたものに反映している。論文の形となる前の、いわば生煮えの「研究アルバム」には、現在の調査ではもはや収集しがたい貴重なデータが含まれている。もちろん、「研究アルバム」という形にはならなかった未整理資料も数多いが、本論では「研究アルバム」に限定し、そのうち精神医療史に関わる冊子の中味を制作年代順に見ていきたい。とはいえ、いつアルバムが作られたかは明記されていないので、アルバムに貼られた写真に印字された撮影の日付、あるいは写真の余白に印刷された西暦（プリントの年代を示すものと考えられる）、他の資料との付き合いなどによってだいたいの制作年代を推察している。なお、便宜的にアルバムには通し番号を付している。番号に続くアルバムのタイトルは、小林自身が付けたものである³⁰⁾。

a. 1970年代(?)に制作されたアルバム

制作年代の決め手となる手がかりはないが、内容的に1970年代に作成されたと思われるアルバムである。

1) アルバム『温泉療法史総論』1

内容：神代から江戸時代まで温泉療法史。方眼紙に手書きしたもの、および文献コピーの切り張り。

2) アルバム『温泉療法史総論』2 付表及写真

内容：江戸時代の医家の肖像画や墓標写真など、神経症や精神障害に効く温泉に関する文献コピーの切り張り。

3) アルバム『明治前精神病者治療所』

内容：伝統的な精神病治療の場所の写真および記事。具体的には、秀巖山大福寺（群馬）、穂積神社（静岡）、大岩山日石寺（富山）、高尾山薬王院（東京）、正中山法華経寺（千葉）、浅山不動尊岩瀧寺（兵庫）、

向昌院藤壺の滝（山梨）、定義温泉（宮城）。ただし、他のアルバムと内容は重複しており、このアルバム自体は未完と考えられる。

4) アルバム『精神病治療史』2

内容：灸法、薬物療法、精神療法、按摩に関する文献コピーの切り張り。光明山順因寺（愛知）、鶴ノ森狂疾院（新潟）の写真。

5) アルバム『精神病治療史』3

内容：鍼治、灸治、按摩に関する文献コピーの切り張り。

6) アルバム『精神病治療史』4

内容：和漢薬など。方眼紙に手書きしたもの、および文献コピーの切り張り。

b. 1972年ころに制作されたアルバム

ここに挙げたアルバムは、神戸の精神科医・生村吾郎が小林から貸し出し（小林にしてみれば、生村に謹呈したつもりだったかもしれない）、保管していたものである³¹⁾。しかし、病床にあった生村から筆者が2011年2月に譲り受けた。生村が生前に筆者に語っていたところによると、「いずれは小林先生に返すつもりだったが、返すタイミングを失った」という。おそらく、小林が体調を崩し旭川に移り住んだために、音信が途絶えたのだろう。

7) アルバム『精神病治療史 水治療法史』(1)

内容：水治療法全般の説明に続いて、岩屋山志明院、紫雲山大雲寺、清水寺・音羽の滝（いずれも京都。1972年6月11日の訪問を反映）、正中山法華経寺・中山病院（千葉。1972年5月21～22日の訪問を反映）、原木山妙行寺および仙滝山竜福寺（千葉）。

8) アルバム『精神病治療史 水治療法史』(2)

内容：秀巖山大福寺（群馬。1972年5月5日の訪問を反映）、浅山不動尊岩瀧寺（兵庫。1972年4月29日の訪問を反映）、高尾山薬王院有喜寺（東京。1972年5月21日の訪問を反映）、大岩山日石寺（富山。小林から委託されて、営業上の知り合いと思われる塩野義製薬の谷川宏³²⁾が1972年5月27日に訪問。その際に撮影された写真および記録を引用）。

9) アルバム『精神病治療史 水治療法史』(3)

内容：向昌院藤壺の滝（山梨。同県の住吉病院の精神科医・松野正弘が1972年5月16日に行った調査を引用）、鉄塔山天上寺（岐阜）、巻向山奥不動寺（奈良。1972年4月2日の訪問を反映）、白糸の滝（山梨）、阿波井神社（兵庫。三沢真一という人物（地元の医師?）が、上記の塩野義製薬の谷川へ報告した写

真や文書がもともになっていると思われる。小林から依頼を受けた谷川が、営業上でつながりのあった三沢に頼んだという筋書きが想像されるが、真相は不明である)、不動瀑(福井)、油山寺の瑠璃の滝(静岡)。

c. 1973年ころに制作されたアルバム

以下の10)の“アルバム『名古屋の精神医学史 戦後編』(1)”は、もともと^{たきた}夢喜田恵子氏(愛知医科大学看護学部教授)が保管していたものである。氏は生前の小林と親交があり、精神看護学の歴史的な研究を進めるにあたって、アルバムを含む少なからぬ資料を小林から渡されていた。しかし、小林資料を用いた研究はすでに終了しているとのことで、筆者は数年前に夢喜田氏からそれら資料を譲り受けた³³⁾。

10) アルバム『名古屋の精神医学史 戦後編』(1)

内容：名古屋市立大学医学部、愛精病院、名古屋大学環境医学研究所、国立名古屋病院、守山荘病院、杉田病院、楠第一病院、香流病院・守山十全病院、中部労災病院、八事病院、中京病院、名古屋鉄道病院、松蔭病院、国立療養所志段味荘。

11) アルバム『名古屋の精神医学史 戦後編』(2)

内容：田所クリニック、名古屋第一赤十字病院、名古屋保健衛生大学ばんだね病院、愛知医科大学、仁愛診療所、精神衛生相談所・精神衛生センター、くすのき学園、名古屋少年審判所・名古屋家庭裁判所、名古屋少年鑑別所。

12) アルバム『京都における精神医学的散歩』1

内容：大内山仁和寺、岩屋山志明院、紫雲山大雲寺、音羽山清水寺、大日堂、臨時病院(相国寺)、京都御親兵病院。

13) アルバム『京都における精神医学的散歩』2

内容：木屋町療病院、栗田口療病院・京都府立医科大学、京都癲狂院・私立京都癲狂院、木瓜原癲狂院、船岡癲狂院、京都帝国大学医科大学精神病学教室、三聖病院。

14) アルバム『京都府療病院』

内容：京都府療病院に関する記事のコピー切り張り、医家の墓標写真など。

d. 1974年ころに制作されたアルバム

以下の18)の“アルバム『山梨』”については、1974年10月24～25日(同年11月1日にも訪問か)に行った山梨県でのフィールドワークを反映していると思われる。19)の“アルバム『精神病の温泉治療』1”は、上記の愛知医科大学の夢喜田氏から譲り受けたものである。

15) アルバム『石川』

内容：石川県の医学史全般に続いて、金沢大学医学部精神病学教室、小野慈善院、能美郡広済舎・松寿園、村下保養院、天池保養所、和田保養院、小立野保養院(および、それに起源をもつ十全病院)、松原病院、金沢脳病院。

16) アルバム『富山』

内容：大岩山日石寺(上記の8)の“アルバム『精神病治療史 水治療法史』(2)”と同じく、1972年5月27日の塩野義製薬・谷川宏調査を反映)、富山脳病院、高岡保養所・柴田病院、野積保護園・白皇山保護園(1974年11月21日の訪問を反映)。

17) アルバム『静岡』

内容：静岡の医学史全般に続いて、穂積神社(1974年6月2日の訪問を反映)、不二大和同園(1974年5月12日の訪問を反映)、静岡脳病院、駿府脳病院、浜松脳病院、沼津脳病院・沼津中央病院、三方原脳病院。

18) アルバム『山梨』

内容：向昌院藤壘の滝、身延山功德会、白糸の滝、甲府市行旅病者救護所・伊勢療養所、刈穂稻荷社祈祷所、山梨脳病院・山角病院、下部転地療養所。

19) アルバム『精神病の温泉治療』1

内容：精神障害に効く温泉などの記述に続いて、定義温泉(宮城)、今神温泉(山形)、寒ノ地獄温泉(大分)、湯の山温泉「明神の滝」(広島。1972年の『大塚葉報』誌³⁴⁾からの写真をコピー)、有福温泉(島根)、海潮温泉(島根)、鷺湯精神病院(島根)、下部転地療養所(山梨。1974年11月1日に訪問か)。

20) アルバム『精神病の温泉治療』2

内容：青森精神病院などに関する文献コピーの切り張り、および方眼紙に手書き。

e. 1975年ころに制作されたアルバム

小林は1974年の7月から9月にかけて長野県を、1975年10月ころには福井県を調査したようで、以下の21)と22)のアルバムはその成果物と思われる。

21) アルバム『長野(2) 精神医学関連施設』

内容：飯田病院精神科、救護所 昭和寮・松風園(松本市)、慈光園・救護所 報恩寮(上田市。1974年9月6日の訪問を反映)、長野市救護所・栗田寮(1974年9月6日の訪問を反映)、長野脳病院(長野市)、鶴賀脳病院・鶴賀病院(長野市。1974年7月訪問か)、倉田病院(松本市。1974年7月7日の訪問を反映)、信州大学医学部精神医学教室、長野県駒ヶ根病院。

22) アルバム『福井』

内容：福井の医学史全般に続いて、平岡脳病院、不動の滝（小浜市。1975年10月28日に訪問か）。

f. 1977年ころに制作されたアルバム

23) アルバム『岐阜県 岐阜の医学』

内容：岐阜の医学史全般に続いて、医学校一岐阜大学医学部精神医学教室、天臣堂、鉄塔山天上寺（1977年8月14日の訪問を反映）。

g. 1978年ころに制作されたアルバム

以下のアルバムは、小林による1977年7月3日の阿波井島保養院（徳島）訪問にもとづくものである。ただし、アルバムには、小林が同年12月3日の第96回東海精神神経学会で発表した「阿波井神社の水行」を短く報じる1978年の『精神神経学雑誌』（第80巻第3号）の記事のコピーが貼られている。したがって、アルバムの制作年代を1978年とした。

24) アルバム『阿波井島保養院 鳴門 徳島県 五二・七・三』

内容：阿波井島保養院。

h. 1979年ころに制作されたアルバム

以下の25)の“アルバム『愛知県精神病院史 戦前編』(2)”および27)の“アルバム『愛知県精神病院史 戦前編』(4)”は、上記の愛知医科大学の茅喜田氏から譲り受けたものである。

25) アルバム『愛知県精神病院史 戦前編』(2)

内容：名古屋大学。

26) アルバム『愛知県精神病院史 戦前編』(3)

内容：村松教授・堀教授・笠原教授、名古屋大学医学部附属病院分院精神神経科（名古屋市東区大幸地区に移転後の写真は1979年9月10日撮影）、精神病患者慰安所・豊橋精神病院・豊橋再生館病院、名古屋脳病院・精治療病院、東山脳病院、救済院・東山寮、八事少年寮。

27) アルバム『愛知県精神病院史 戦前編』(4)

内容：内藤病院、愛知県立精神病院・愛知県立城山病院、豊橋脳病院・岩屋病院、北林病院、岡崎脳病院・三河病院。

i. 1980年ころに制作されたアルバム

以下の28)の“アルバム『愛知の医学校』(1)”、29)の“アルバム『愛知の医学校』(2)”、30)の“アルバム『愛知の医学校』(3)”および32)の“アルバム『愛知の医学校』(5)”は、上記の愛知医科大学の茅喜田氏から譲り受けたものである。

28) アルバム『愛知の医学校』(1)

内容：明眼院（1973年5月10日および1980年3月20日の写真あり）、堀杏庵、張振甫。

29) アルバム『愛知の医学校』(2)

内容：静観堂・医学館、佐藤貞毅塾（1976年7月4日の写真あり）、西尾藩医学校・済生館、名古屋藩・仮医学校、蜜蜂義塾（1976年7月30日の写真あり）。

30) アルバム『愛知の医学校』(3)

内容：医学講習所一名古屋大学医学部など。

31) アルバム『愛知の医学校』(4)

内容：張振甫、私塾・佐藤貞毅、浅井医学館、明眼院、光明山順因寺・羽栗病院など。

32) アルバム『愛知の医学校』(5)

内容：愛知歯科医学校、名古屋薬学校・愛知薬学校・名古屋薬科大学・名古屋市立大学薬学部。

j. 1982年ころに制作されたアルバム

以下のアルバムは、上記の愛知医科大学の茅喜田氏から譲り受けたものである。

33) アルバム『精神病治療史（総論）』1

内容：有史前、医心方、鍼術・杉山和一（1982年9月16日に東京で撮影した写真あり）、吐方・多紀元堅、水治療法など。

k. 1986年ころに制作されたアルバム

以下の一連のアルバムは、小林が1987年に『臨床精神医学』誌に掲載した論文「日本精神医学風土記 愛知県」のために集めた資料にもとづくと思われる。

34) アルバム『愛知県精神医学風土記』1

内容：牛川人（豊橋市）、三ヶ日人、浜北人、船山古墳（豊川市）、二子古墳（安城市）、名和兜山古墳（東海市）、熱田神宮、尾張国府跡、尾張国分寺跡など。

35) アルバム『愛知県精神医学風土記』2

内容：三河国府跡、三河国分寺跡、田代三喜、曲直瀬道三、馬島流眼科、光明寺順因寺、建中寺（1986年8月3日撮影の写真あり）、張振甫など。

36) アルバム『愛知県精神医学風土記』3

内容：尾張藩校・明倫堂跡、浅井家墓標写真、医学館跡、おためし場跡、西尾藩医学校・済生館など。

37) アルバム『愛知県精神医学風土記』4

内容：名古屋藩仮病院、愛知の医学校、蜜蜂義塾、好生学校、愛生舎、皇漢医学校など。

38) アルバム『愛知県精神医学風土記』5

内容：医学講習場一名古屋大学医学部、ローレツ、後藤新平住居跡など。

39) アルバム『愛知県精神医学風土記』6

内容：愛知医学校など。

40) アルバム『愛知県精神医学風土記』7

内容：愛知県立医学専門学校など。

Ⅰ. 1988年ころに制作されたアルバム

41) アルバム『杉田直樹先生・内藤稲三郎先生・滝沢太一先生』

内容：杉田家(杉田直樹)墓標写真(1987年9月13日)、北林家(北林貞道)墓標写真(1988年7月17日)、内藤家墓標写真、溝口家墓標写真、二本松錠墓標写真、瀧沢太一墓標写真。

以上がアルバムの概要である。以下では、これらのアルバムを通して見える小林の歴史記述の特徴と、アルバムがもつ近現代日本精神医療史上の価値について述べたい。

Ⅳ 小林靖彦資料に見る歴史記述の特徴と精神医療史上的価値

小林の「研究アルバム」は大きく二つのコンセプトで作られている。

一つ目は、精神病治療を方法別に記述するもので、水治療法(滝滝、滝水、温泉治療など)、精神療法(加持祈祷など)、薬物療法(和漢薬)、灸法などが好んで取り上げられたテーマである。このような記述方法は、呉秀三の精神病学の教科書³⁵⁾などの時代から見られる普遍的なものと言えるだろう。上で紹介したアルバムの、たとえば、“1) アルバム『温泉療法史総論』1”や“4) アルバム『精神病治療史』2”などが好例だろう。

しかし、かつての治療法を一般的に語るだけではなく、それが行われていた特定の場所の、具体的な実践の記述が加われば、より一層読者の関心を引き付けることになる。そのような意味で、1918年の呉秀三・榎田五郎の論文「精神病者私宅監置ノ実況及び其統計的観察」でとりあげられた、各地の民間治療場におけるフィールドワークにもとづいた記述方法は今日でも興味深い。小林はそこからかなりインスピレーションを得たに違いない。事実、呉・榎田の論文で紹介されている「高雄山薬王院」「正中山法華経寺」「原本山妙行寺」「穂積神社」「大岩山日石寺」「定義温泉」は、小林も繰り返し取り扱っている研究対象であり、そのいくつかの場所には彼自身が足を運び、「研究アルバム」には現地調査がかなり反映されている。このような、“治療法+「治療の場所」”という手法で作られた

アルバムの代表が、“7) アルバム『精神病治療史 水治療法史』(1)”、“8) アルバム『精神病治療史 水治療法史』(2)”、“9) アルバム『精神病治療史 水治療法史』(3)”である。

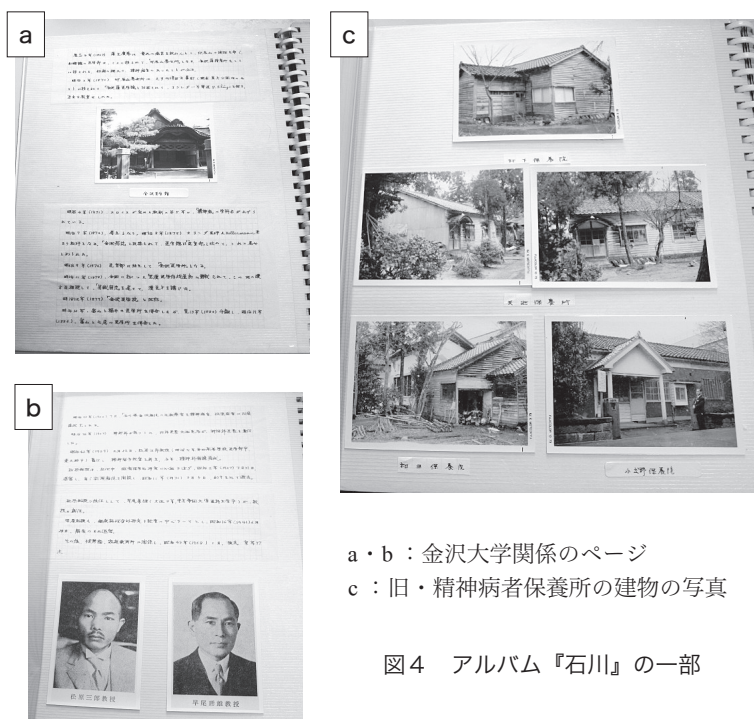
小林の二つ目のコンセプトは、こうした民間治療場に代表される「治療の場所」から出発して、やがて民間治療場を含む地域全体(おもに都道府県レベル、以下、「都道府県」は「県」と省略)の病院や他の施設の歴史全体にまで視野を広げるものである。その結果、各地域をテーマにしたアルバムが生み出されたと推察される。“15) アルバム『石川』”や“16) アルバム『富山』”などが典型例である。小林はあらゆる地域をまったく同価値の対象物と捉えており、しばしば歴史家が陥りやすい、「中央と地方」「帝国大学と地方の医学校」「近代と伝統との間の軋轢」といったスタンスで、精神医療史を記述してはいない。むしろ、小林の思想を貫いているのは、江戸時代からの幕藩体制を引き継いだそれぞれの県は、他の県と類似の機能と構造を持ちつつ外部から独立したマイクロコスモスであるという、近代化ではなくいわば「近世」の論理でさえあるといえる。したがって、小林の調査対象には、常に江戸時代の藩があり、その藩で作っていた医学校、そこから派生した明治時代の医学専門学校、そして医科大学、大学医学部という展開が含まれてくる。しかし、このルートには乗らなかった病院や、民間の施設、神社仏閣での治療所なども、県という単位の間では互いに同価値のものとしてすべてが調査対象になっている。

たとえば、1974年ころに制作された上記15)の“アルバム『石川』”に描かれた精神医療史をごく簡単に見てみよう(図4)。このアルバムには、藩の医学校、そこから発展して、明治時代の金沢医学校、第四高等学校医学部、金沢医学専門学校、金沢医科大学、金沢大学医学部精神医学教室の歴史が写真とともに説明されている。小林はさらに、民間の施設、とくに金沢には京都の岩倉と同じように多くの精神病者保養所があったことに着目した(すでに述べたように、この保養所調査は小林の代表的な論文「精神病者保養所の群生していた2つの地域について」として、1974年の『精神医学』誌に発表されている)。加えて3つの戦前からある精神病院、すなわち、松原病院、金沢脳病院、十全病院の資料がアルバムに閉じられている。こうして、医学校、病院、民間施設などの資料を集め、実際にその場を訪れ、関係者に会って話を聞くという

スタイルで、各地をめぐり、そのエッセンスをアルバムに整理していった。

ところで、小林が現地調査の際に撮影した、建築物などの写真にはきわめて貴重なものが含まれている。訪れた当時にはすでに「廃墟」に近いものであっても、現在では痕跡すら残っていないケースがある。記録にはその存在が示されている、どのような形状だったのかわからなかったものが、小林の資料ではじめて了解できたというケースである。とりわけ記録に残りにくい、民間の神社仏閣の典型例を紹介したい。

千葉県旭市にある仙滝山龍福寺は、「岩井の滝」で知られていた。少なくとも精神衛生法が施行された1950年頃までは、精神病者が寺に参籠し、この滝に浴びて治療をしていた。1949年、千葉医科大学の佐藤壹三はこの寺を訪れ、「岩井の滝」での精神病治療の実際を報告している³⁶⁾。それによると、参籠していた患者は滝を浴びるとき以外は、鎖にしばられて収容所に閉じ込められていたという。実は、この寺の庫裡の後ろにあったという収容所の写真と思われるものが小林靖彦の資料から発見された。収容所の写真はこれまで見出されていなかったもので、当初は日本精神医療史上の（ごく一部の専門家にとっての）「新発見」と考えていた。ところが、本論を執筆するにあたって小林資料を詳細に再検討したところ、新たな事実が判明した。千葉県の原木山妙行寺および仙滝山竜福寺については、小林から委託された次男が1972年10月31日に訪問したのである。したがって、写真も次男が撮影したもので、精神病者の収容所のプリント写真の裏に「S 25年にとりこわされた病棟に似せて26、7年に建てられた講の宿泊所」の記述があった。これが事実だとしたら、佐藤壹三が1949年に見た収容所の建物ではなく、その後に再建されたもののようだ（とはいえ、写真は往時をしのぶものとしての価値はあるだろう）。他方、「チョコレート色」といくつかの文献³⁷⁾で表現された、庫裡のカラー写真が小林資料で見い出された。これまでこの建物の色が研究者によってカラーで確認されたことはなかっただろう。小林のカラー写真を見ると、「チョコレート色」よりもむしろピンク色に近い（図5）。後にピンク色に塗り変えられたのかもしれない。そし



a・b：金沢大学関係のページ
c：旧・精神病者保養所の建物の写真

図4 アルバム『石川』の一部



図5 仙滝山龍福寺（千葉県）の庫裡

出典：アルバム『精神病治療史 水治療法史』（1）

本稿もカラー写真を掲載できないので、あいかわらず建物の色を示すことができないのは残念である。

て、今はかつての収容所（および、その後に建てられてという「講の宿泊所」）も庫裡も取り壊されて存在しない³⁸⁾。

群馬県高崎市の山あいにある秀巖山大福寺の室田不動も、精神病治療の滝場としてよく知られていた³⁹⁾。図6に写っている建物は「瀧水院」と呼ばれ、治療のためにここに宿泊するための患者と家族のための宿泊所であった。小林がこの地を訪れた1972年5月5日には、患者と家族のための宿泊所の機能はなく、おそらく建物だけが残っていたのだろう⁴⁰⁾。2006年6月に筆者が室田不動を訪れたときには、すでにこの建物は跡形もなく消えていた⁴¹⁾。



図6 秀巖山大福寺（群馬県）の「瀧水院」
出典：アルバム『精神病治療史 水治療法史』（2）



図7 奥不動寺（奈良県）の「白山荘」
出典：アルバム『精神病治療史 水治療法史』（3）

一方、奈良県桜井市にある奥不動寺は、おそらく戦前の文献では、内務省の複数の『精神病者収容施設調』⁴²⁾および1937年の菅修の論文に「精神病者保養所」などとしてその名前が掲載されているのみであった。この寺に関する精神医療史上の詳しい報告は、小林のアルバムの記述以外には見出されていない⁴³⁾。小林は1972年4月2日に奥不動寺を訪れ、境内にある「白山荘」に精神障害者と思われる5人が滞在し、加持祈祷を行っているのを目撃している（図7）。筆者は、2010年8月に奥不動寺を訪れたが、住職は代替わりしており、かつての治療の実態は伝聞に近いものでしかなかった⁴⁴⁾。小林が撮影したかつて「白山荘」だった建物はあるが、当時とは周囲の様子も含めてかなり変化し、また当然ながら患者はいない。小林の記述は写真とともに貴重なものとなっている。

さて、小林靖彦は各地での資料収集の先に、なにをしようと考えていたのだろうか。先に言及した浜松の三方原病院時代の小林のアルバムを紹介した新聞記事

の中で、「今までの調査では、愛知県分の資料がアルバム150冊分集まっているため、当面は愛知県の病院・治療史を本にまとめる予定」と述べている。また、小林には全都道府県の精神医療史をまとめる野望もあったようだ。これも上で述べたが、1973年に名古屋市立大学で行われた研究会用の資料は、各都道府県の精神医療史に関する説明と写真が貼り付けられたりっぱなものだった。この資料の内容をバージョンアップした草稿はいくつも発見されており、いつかは本の形にしてまとめたいと考えていたのだろう。しかし、結局のところ、全国はおろか、愛知県の医学史も本にしてまとめることはなかった。

おわりに

小林靖彦の精神医療史研究の意義についてまとめた。小林には、日本各地の精神病治療の歴史をまとめたいという願望がある一方で、日本の精神医療の現状についての見解を述べ、社会的・政治的な目立った働きかけをすることはほとんどなかった⁴⁵⁾。また、遺族へのインタビューによると、小林はいわば「趣味的な」個人研究に限界を感じたようで、ある時から精神医療史研究を断念してしまった⁴⁶⁾。

にもかかわらず、小林の研究は、いまでも強烈なメッセージを発していると思わざるをえない部分がある。まず、小林の集めた資料は、戦前と現在との間の空白を埋める役割を果たしている。1950年代以降、わが国の精神障害者処遇が医療化し、かつ精神医療は急激に入院医療へと傾斜していくが、小林はこの時代の激変する精神医療の歴史と現状を、一方では全国の各地で消えつつあった「遺跡」を、他方で新興の精神医療施設を記録することで、可視化することに成功している。

また、小林が、日本の精神医療史ではなくて、日本の各地域の歴史を記述していたことは注目値する。小林のデビュー作である1963年の『日本精神医学小史』の冒頭で、すでに地域への愛着とアイデンティティを強く肯定的に表明している⁴⁷⁾。そのことと、小林の地域研究との深い親和性とは無関係ではないだろう。これは、明治以降の日本の歴史を、西欧近代化・中央集権化の歴史と捉える近代化の視点ではなく、逆に地域分散化、地域主義の視点から理解する立場と言えよう。地域社会と精神障害者との関係を再構築している精神保健福祉の今日的な視点にも結びつくものではなかろうか。

最後に付け加えたいことがある。小林靖彦の「無念」を少しでも晴らす意味で、2011年10月に愛知県立大学で行われた第15回精神医学史学会の開催に合わせて、ささやかな「小林靖彦回顧展 Kobayashi Yasuhiko: A Retrospective Exhibition」を開いた。小林が日本各地を訪れて集めた資料の一部を展示し、彼の業績と日本の精神医療史研究への貢献について振り返りかえるという企画だった。小林家の人たちに好意的に受け止めていただいたのが、筆者の何よりの喜びだった。

追記

本稿は、2014年6月26日に開催された第110回日本精神神経学会学術総会（於：パシフィコ横浜、神奈川県）のシンポジウム「隔離の歴史」における、筆者の講演「近現代日本の精神医療と民間治療の歴史—精神科医・小林靖彦の研究資料から—」の発表原稿を修正し、加筆したものである。

注

* 愛知県立大学教育福祉学部教授

- 1) 小林靖彦：日本精神医学小史。中外医学社、東京（1963）。
- 2) 小林靖彦：日本精神医学の歴史。（懸田克躬編集代表）現代精神医学大系 第1巻A：精神医学総論I、125-161、中山書店、東京（1979a）。
- 3) 呉秀三：我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設。東京医学会事務所、東京（1912）および呉秀三・榎田五郎：精神病患者私宅監置ノ実況及ビ其統計的觀察。東京医学会雑誌、32(10)：521-556、32(11)：609-649、32(12)：693-720、32(13)：762-806（1918）。
- 4) 菅修：本邦ニ於ケル精神病患者並ビニ之ニ近接セル精神異常者ニ関スル調査。精神神経学雑誌、41(10)：793-884（1937）。
- 5) 金子準二編著：日本精神病学書史。359、社団法人日本精神病院協会、東京（1965）。
- 6) 松沢病院医局病院問題研究会：精神衛生法をめぐる諸問題。東京（1964）。
- 7) 岡田靖雄：私説松沢病院史。岩崎学術出版社、東京（1981）。
- 8) 小俣和一郎：精神病院の起源。太田出版、東京（1998）。
- 9) 八木剛平・田辺英：日本精神病治療史。金原出版、東京（2002）。
- 10) 岡田靖雄：日本精神科医療史。医学書院、東京（2002）。
- 11) 岡田靖雄：前掲書（2002）、173-174。
- 12) 岡田靖雄：青人冗言10 精神科医療の歴史・社会・未来。6-7、青柿舎、東京（2013）。
- 13) 小俣の『精神病院の起源』の注・文献を見ればわかるように、小林の著書・論文から多数引用されている。ただし、小林の論文「江戸時代の精神医学 2. 治療論」（『臨床精神医学』、第11巻第1号、49-54頁、1982年）について、「小林は「明治以前の精神病治療所」として全国で計二五ヶ所の施設を列举し、そのうち一八ヶ所で水治療が行われていたとしているが、その中には史料の裏付けを欠いたものも少なくない」（小俣：前掲書、65）と評している。
- 14) 八木・田辺の『日本精神病治療史』には小林の論文が引用されているが、小俣の影響（その背後には小林の業績がある）も大きく、「小俣和一郎氏の『精神病院の起源』（中略）には“先を越されてしまった”感があったが、同時に貴重な資料として利用もさせていただいた」（八木・田辺：前掲書、「あとがき」と書かれている。一方、岡田の『日本精神科医療史』は小林の論文「日本精神医学の歴史」（1979年）を引用している。また、岡田の同書の「あとがき」には「出版されたばかりの八木剛平・田辺英『日本精神病治療史』（中略）が花も実もつけているとすれば、わたしのは幹をかいただけである」との記述がある。ちなみに、『呉秀三先生記念 精神科医療史資料通信』（総括号、2004年6月1日発行）によれば、小林は一時期、岡田靖雄（と吉岡真二）が主宰していた「精神科医療史研究会」の会員だった。小林の資料の中には、岡田から謹呈された論文抜刷が多数存在している。
- 15) 岸本の経歴については、名古屋市立大学精神医学教室のホームページ <http://www.ncupsychiatry.com/jp/news/history.html> を参照。
- 16) 学会（XI International Congress of Genetics, 2-10 September 1963, The Hague, The Netherlands）のプログラムによれば、小林を筆頭者（Yoshihiko Kobayashi, K. Kishimoto, M. Matsui, H. Tsuboi, Y. Shiraki, K. Nakai）とする報告は、1963年9月9日の午前中のセッション（Session 15e：Heredity of syndromes I）で9時40分から20分間行われた。小林はL. N. Wentとともに、このセッションの司会も務めた。会場はハーグ近郊の海岸沿い街 Scheveningen にある Palace-Hotel の room 2であった。
- 17) たとえば、小林靖彦：精神薄弱の成因と対策 精神薄弱の遺伝。第17回日本医学会総会学術講演集—1967年の日本医学—、第III巻：755-761（1967）／小林靖彦：精神薄弱の遺伝／精神薄弱の治療。愛知教育大学特殊教育教室研究紀要、第一集：93-134（1968）。
- 18) 2008年11月14日に筆者が旭川で遺族から聞いたところでは、小林は名古屋市立大学助教授時代に「医学より歴史がやりたかった」「医者はいやだ」と漏らすことも

- あったという。1969年、名古屋市立大学から転じ、愛知県厚生連尾西病院院長に就任したあとも病院院長として臨床もできず、冠婚葬祭に顔を出す機会が多くなったことについて、「医者の仕事じゃない」と不満を言うこともあったという。一方、尾西病院時代の1970年4月12日から中部日本放送（CBC）のラジオ番組『いどばたジョッキー』に精神科医の立場から「セックス・カウンセラー」としてレギュラー出演していた。cf. 小林靖彦：性問答百話（CBC・いどばたジョッキー）、名古屋（1971）。
- 19) 菅修：前掲論文。
 - 20) 小林靖彦：精神病患者保養所の群生していた2つの地域について、精神医学，16(10)：909-916（1974）。
 - 21) この講演の抄録は、小林靖彦：阿波井神社の水行、精神神経学雑誌，80(3)：128（1978）を参照。
 - 22) この講演の抄録は、小林靖彦：特別講演「東海地方の精神医学の歩み」、精神神経学雑誌，81(9)：619（1979b）を参照。
 - 23) 小林靖彦：前掲論文（1979a）。
 - 24) 小林靖彦：江戸時代の精神医学 2. 治療論、臨床精神医学，11(1)：49-54（1982）。
 - 25) 小林靖彦：近況報告、尾西病院四十年誌，19，尾西病院，祖父江町（1986）。
 - 26) 小林靖彦：日本精神医学風土記 愛知県、臨床精神医学，16(9)：1335-1344（1987）。
 - 27) 中日新聞 1981年5月13日。
 - 28) 旧・小林邸には、医学史とは関係がない「研究アルバム」も多数保存されていた。たとえば、各地の「城めぐり」、果ては「浜松のうなぎ屋めぐり」といったものもあった。
 - 29) 小林靖彦：前掲書（1963）。
 - 30) 小林靖彦の「研究アルバム」を分析した研究としては、筆者の研究指導のもとで行われた小林ひとみの「ミクロレベルでとらえる日本の精神医療の歴史について—小林靖彦の資料を参考にして—」（愛知県立大学大学院国際文化研究科修士論文、2010年）、および、同論文にもとづいた第111回日本医史学会（2010年6月、茨城大学）での研究発表「小林靖彦の資料研究—ミクロの視点から見た日本の精神医療の歴史—」がある。筆者は本論を執筆するにあたり、小林靖彦の遺族から譲渡された「研究アルバム」を含む全体の資料を再検討したため、小林ひとみによる「研究アルバム」の整理結果とは異なっている。
 - 31) 2005年秋ごろと記憶しているが、筆者は日本思想史研究者の兵頭晶子氏を通じて、生村が小林の「研究アルバム」を保管していることを知った。
 - 32) 谷川は単なる“営業の人”ではなかったようで、専門

- 誌に塩野義製薬が開発した抗生物質「フロモックス錠」を紹介する記事を書いている（cf. 谷川宏：経口用セフェム系抗生物質製剤、ファルマシア，33(7)：772-773（1997））。
- 33) この研究成果は、多喜田恵子・大平政子：愛知県下精神病院の設立初期における治療と看護、名古屋市立大学看護学部紀要，2：81-87（2002）として公表されている。
 - 34) 稲垣幾代：秘湯をたずねて（その13）中国路の諸温泉、大塚薬報，244：17-24（1972）。
 - 35) 呉秀三の『精神病学集要』に書かれている「治療通論」などがその典型だろう（cf. 呉秀三：精神病学集要第二版 前編、吐鳳堂，東京（1916）〔復刻版：創造出版，東京（2003）〕）。
 - 36) 佐藤壹三：“岩井の滝”見聞記、千葉県精神衛生，5：1-5（1962）。
 - 37) 「チョコレート色」と述べているのは、佐藤壹三の前掲論文および浅井利勇：日本精神医学風土記 千葉県、臨床精神医学，14(11)：1727-1735（1985）である。浅井論文に掲載された庫裡（論文では、この建物について「つい30年前までは精神病患者の病室として使われていた」旧病室としているが、収容所が別に存在していたので、誤った記述だろう）はモノクロ写真なので、建物の色はわからない。
 - 38) 橋本明：仙瀧山龍福寺と岩井の滝、近代日本精神医療史研究会通信，11：15-20（2007）。
 - 39) 香内信一：日本精神医学風土記 群馬県、臨床精神医学，18(3)：427-432。
 - 40) 小林がアルバム『精神病治療史 水治療法史』(2)に記載した「秀巖山大福寺」のテキストは以下の通り（ただし、読みやすさを考慮して、改行は適宜変更している）。

寺は、群馬県群馬郡榛名町大字下室田にあり、天台宗山内派に属し、里見の光明寺の末寺にして、開創の年代不明なり。その本尊を祭る滝水院は、上室田にあり、この創立も不明なるも、貞和年間（1345～1350）の如し。

東京・上野から高崎線にて高崎下車、バスにて室田に至る。滝不動までのタクシーの運転手の曰く「昭和30年頃まで、精神病の人が治療を受けていたが、今はない。滝は頭ではなく項を打たせるのだ。今の住職さんは学校の先生だ」と。10分で着く。

立札あり、「滝不動」と。少し降れば、左手、木立の間に遠く雲に煙る山並を望む。石段40段余り降りれば、広き所あり。大木あり、山迫り、昼なお暗し。右手、山肌に石の不動尊たち、その左、二本の大木にしめなわを渡し、奥に細長き滝落つ、滝壺浅く、水清く、魚の泳ぐを見る。左、一段高き所に、滝不動明王

(大聖不動尊)を祭る堂あり、享和2年(1805)建立とあり、その左に、滝のありし跡あるも、水枯れ果てぬ。堂の前の石段を降りれば滝水院あり。昔かかる小屋4棟ありしと云う。慶応年間(1865~1868)に建てられしものもあったと云う。昭和10年(1935)当地方を襲いし大水害により大半流失せり。その時、住職藤平徳沖、病者3、4名と共に死す。

徳沖の子、藤平徳孝住職に刺を通じ、寺の縁起、下宿人名簿、診断書を拝見す。滝治療の創始の年代も不明なるも、明治以前なること確実なり。明治28年(1895)第35世、鈴木智田が命を受けて提出せる調査書によれば、「此飛泉は能く脳患を医して妙なり。脳を患う者泉下に坐して水をして頭上を撲たしむれば脳熱忽に消して快を覚ゆ。既に隣国の知る所となり。信州、武州、野州より脳病癲狂の者来り療す。殊に夏日は避暑の客遠近より来り遊び日々来るあり去るあり。沐する事三句にして癒えて帰らざる者なし。実に靈泉と謂うべし」とある。

滝は、高さ2丈4尺(約7m)ありとされ、「室田滝」とも呼ばれ、また田野から不動尊が流れ来たりとの伝説あり、ために「田野の滝」とも呼ばれる。室田村の医師、佐藤新太郎、正木辰雄の発行せる診断書あり。病名と滝治療の方法を規定しあり。1日3回、1回5乃至30分とするもの多し。外来の者あり。1月乃至3月下宿する者あり。長きは3年居りし者ありと。精進料理を食せしむる他には特別なことなし。ある時代、断食を併用せしことありと。手枷、足枷を装し、木で造りし椅子(小学校の机椅子のごとし)に縛りつけ、滝の下に置く。打たせる場所は頂部とする。治療進めば、出す汗臭く、滝にうたれるを嫌う程の眠気を催し、眠りつつけて醒めて快癒すと云う。

全盛時は、可成り大規模なりしも、水害により縮小し、昭和30年(1955)廃止せられ、今は収容者は勿論、滝治療を受ける人もなし。昭和47年5月5日

- 41) 橋本明：群馬の滝場—室田と滝沢—、近代日本精神医療史研究会通信、8：3-12(2006)。
- 42) 昭和初期に複数回行われた内務省の『精神病患者収容施設調』に、奥不動寺の名前で出ている(cf. 岡田靖雄・小峯和茂・橋本明編：精神障害者問題資料集成 戦前編 第8巻、六花出版、東京(2011))。
- 43) 小林がアルバム『精神病治療史 水治療法史』(3)に記載した「巻向山奥不動寺」のテキストは以下の通り(ただし、読みやすさを考慮して、改行は適宜変更している)。

昭和47年4月2日(日曜日)。午前7時発の近鉄特急にて名古屋を立つ。途中、青山高原あたり、車窓より雪の舞うを見る。寒し。大和八木駅下車。急行にて

引き返し、9時過ぎ桜井駅着。タクシーを拾い、三輪、箸中、巻野内を経て、車谷に入り、「右不動寺白山道、左名張」の石碑のところで車を捨て、右に山道に入る。緑の木々の中、赤き椿あり。鶯・□[注：判読不能]の声、谷川の水音を聞きつつ、オーバーの襟を立てて登ること40分。身体温まり、汗ばむ。

「↑白山 →奥不動・長谷ハイキングコース」の立て札あり、右に小道あり、石段数十段の上、壁に「白山荘」と書かれし建物あり、窓に柵などあり、精神病舎のごとし。先ず、樹木生えず、風化せし岩山たる「白山」に登る。ハイキングに来た子供たち遊ぶ。這い上り、伏して眺むれば、道を隔てて白山荘と寺院を見る。

降りて、小道を通り、石段を昇れば佇立して常同的に手をこする初老の男、炬燵に入りたるまゝ「今日は」と笑いかける痴呆化せし女(てんかん患者の由)を柵ごしに垣間見て、境内に入れば、右手に参籠所あり。加持祈祷の最中、真暗き中、読経の声、説教する声、叫声、怒声、終わりと、中年の男、若き男女ら5人、参籠所を出でて、白山荘の接客の間にいる。昼食を馳走されるごとし。

住職の尼僧に名刺を渡し、話を聞く。迂遠にして要領を得ざるも、大意次のごとし。奈良県桜井市辻の巻向山奥不動寺は、桜井市の北方、三輪山の東北の巻向山(365m)の頂きにあり、真言律宗に属し、西大寺の末寺なり。古い歴史を有する寺なりしも、佐伯某なる住職の時、住職遊興に耽り、土地を売り払い出奔、為に無住となる。ある日、樵、不動さんを発見。明治39年(1906)3月1日、植村尊龍らによって再興さる。内に、参籠所を造り、外に、附近の谷川を利用して滝を造り、加持祈祷、灌水、および境内の水を飽飲せしめて、精神病患者の平癒を祈願せり。

また、境内に精神病患者保養所「白山荘」(白山に因みて名付けられた)を造り、一時は25名をも収容し隆盛なりしも、昭和25年(1950)精神衛生法公布され、昭和29年(1954)県の役人來たり廃止を命ぜらる。入所者の多くは精神病院に移送され、頓に寂れぬ。その時、懇願して残せし5名の病者なお預り居り、医師の派遣を願い、古えの隆盛にもどしたしと切に願う由。

「病気の時は、薬を服むもよし、病院に入るもよし、されど、精神の病は親が祖先の霊を祭らざりし因縁によるものなれば、医薬のみにては効なからん。当寺は、月8千円にて預り居り、全く奉仕の気持ちなるに……」。

昼食をすすめられたるも辞退し、昼前下山。途中、谷間に降りて「仮懸泉」を見る。傍らに小さな石仏を

祭る。滝に打たれ、出でて仏を拝み、また滝に打たれる。石仏の前に供物あり。

44) 奈良県・奥不動寺を訪ねて、近代日本精神医療史研究会ブログ2010年8月21日 (<http://kenkyukaiblog.jugem.jp/?eid=124>).

45) 1971年11月12日に小林が名古屋市立大学で行ったと思われる講演原稿「精神科医療の側面」は、彼の精神医療の現状への思いが示された数少ない記述かもしれない。その中で小林は、当時の日本医師会会長・武見太郎の「精神病院は牧畜業」という発言、および朝日新聞で連載されていた「ルポ精神病棟」に書かれた「公衆便所なみベッド」「医師でなく牢番」といった精神病院批判を批判的に論じている。

46) 2008年11月14日に筆者が旭川で遺族から聞いたところでは、小林は精神医療史をやめた理由を次のように説明していたという。「個人の力でチマチマやっても

大した仕事はできない。関西方面の大学でこれから本格的に医学史研究のプロジェクトを立ち上げて調査をするようだ。自分の仕事は終わった。これからは自分の趣味の調査をする」といって、途中から「城めぐり」に転じたい。だが、筆者の知る限り、小林の言う某大学の医学史研究のプロジェクトなるものがその後実施された形跡はない。

47) 小林は『日本精神医学小史』の「自序」で次のように書いている。「私は精神医学を専攻しております。そしてその場所は名古屋であります。(中略)日本人達は、古く朝鮮、支那、近くは欧米諸国の影響を強く受け乍ら文化を育てて参りましたが、その日本人の中で、特徴ある郷土文化をもち、将来を夢みている動いている人間群であります。この中にいる私は、人間として、日本人として、愛知県の人間、名古屋市の人間として(中略)精神医学を専攻しているわけであります。」